

文書館  
もんじょかん  
動物記

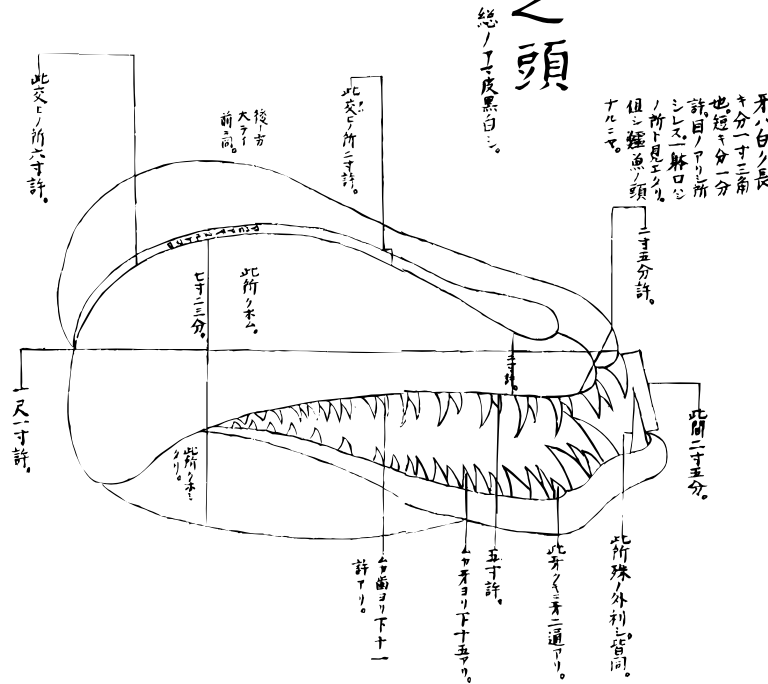


書庫に棲む動物たち

17

へび

大蛇之頭



「防長古器考 有図 87」

蛇と水神

上の図は、長さ「一尺一寸許（ばかり）」と記されているので、長さ33cm 余の「大蛇ノ頭」ですが、冒頭の説明の末尾に「目ノアリシ所シレズ、一体口バシノ所ト見エタリ。鱷魚（ワニ）ノ頭ナルニヤ」とあるように、おそらくワニの頭骨の口の部分で、ヘビの頭骨ではないでしょう。

この「大蛇之頭」には「蛇頭記」という詳細な伝記が漢文で付けられており、その概要は以下のとおりです。

「この蛇頭は熊毛郡三輪村（現光市）の山城又右衛門家の旧蔵で、今なお邪気を除く。むかし筑前筵田郡月熊村（現福岡市博多区月隈）に大きな湖があり、大蛇が棲んで人を害していた。剛毅勇強、膂力人に優れていた周防の山城某（又右衛門の先祖）がこの大木のような大蛇を退治し、村人たちは喜んだ。山城某は蛇頭をもって村に帰ったが、のち

不浄をおそれて萩の総源山海潮寺に納めた」

ワニならば今の福岡県の湖にいるのは合点がいきませんが、それはともかく、人を害する大蛇を退治した伝承は、防長では山代地方（岩国市や周南市の北部）に多く残っています。「防長風土注進案」でも、宇佐郷大原村（旧錦町）の小五郎山で讃井吉兼が九尋の大蛇を退治した、生見村（旧美和町）の椿某が数尋の大蛇を射殺したが、祟りがあり「寄江社」としてまつた、本郷村（日本郷村）の龍眼寺は、昔近くの淵に棲む悪蛇を退治し、その骨を杭にして立てた寺だとか伝えています。

蛇は水神と深く関わっていると考えられ、水辺の蛇退治の伝承は、あるいは「猿猴のわび証文」同様、治水の歴史の断片を伝えているのかもしれない。

長門市依山の「雨蛇」（うじゃ）

感應の験と仕候、必違からす雨を催、今に其奇瑞著き事にて御座候

七重の瀧雨蛇の圖  
長六寸ヨリ七寸位マテ其餘ハ長キ分モ短キ分モ無之  
鱧ノ子ニ似テ小異ナリ  
右當村の内七重の瀧に往古より雨蛇と唱來り候、夏分早魃の砌は必地下人雨乞とて、多人數相催し巖上に神酒を備へ、各心々に祈誓を込候節、瀧の底より岩を傳ひ水際より壺問程も登り來り候を、手々に扇を開き雨蛇を載せて本の瀧へ放し申候、雨蛇の數多き程を悦び



依山村で雨乞いに用いられた「雨蛇」（「防長風土注進案」）。「七重の滝」に棲む小さな生き物だが、「鱧（うなぎ）ノ子ニ似テ小異ナリ」と記されており、実際に雨乞いに用いた老人たちも、「耳のような突起があった。蛇ではない」といいます。

## つゆざえもん（梅雨左衛門）

岩国市六呂師（ろくろし）の大藤という山あいの集落のはずれの田のほとりに、「烏帽子岩」とよばれる大きな岩があります（写真上）。

江戸時代に編纂された「玖珂郡志」（県史編纂所史料 75）によれば、概略は以下のとおりです。

「大岩の中に一双の小蛇。形は烏蛇の如し。頭は白い。毎年入梅の日より頭を出し退かず。半夏の日に至って初めて穴の中に入る。梅雨左衛門という。この蛇古より太らず、年々同じ形なり。もし遅く出るときは祭事あり」

この伝によると、「梅雨左衛門」とよばれる頭が白い小蛇は雨をよぶ水神として認識されているようです。梅雨時分の雨は農民たちにとって大きな関心事であり、その水をコントロールすることは悲願でもありました。梅雨左衛門の出現が遅れれば催されるという祭事は、村をあげての雨ごいの祭りであったに相違ありません。

実はこの梅雨左衛門、六呂師だけでなく、山口県近辺で拾っただけでも、周南市夜市、同八代、岩国市美和町岩根、同周東町祖生などに記録が残っています（右図）。島根県東部にはもっと多くの例が報告されており、多くは同様の小蛇の姿で、水神の性格を強くもっています。

これらの梅雨左衛門を「水神」と呼ぶことはたやすいのですが、その背後に、人々の農業用水への切実な思いを「白い小さな蛇」という具体的な姿に～精神的・即物的に～デザインした「何者か」の影を認めないわけにはいかないでしょう。いわば「祈りのコーディネーター」とでもいえそうな何者かの影が、そこに垣間見えるのです。



「梅雨左衛門」と呼ばれる植物も存在します（学術名ギンリョウソウ）。

葉緑素をもたず、足首ほどの高さで立っている姿は、小さな白蛇が、かま首をもたげている姿にそっくりです。これまた、誰がこの植物を「つゆざえもん」と名付けたのでしょうか。

